

鎌田 喜八（かまた・きはち）

1、プロフィール

青森県から戦後初めて投稿という険しいルートを通して、劇的に中央詩壇に登場した詩人。「詩学」新人賞、第一回土井晩翠賞受賞。戦後詩の最深部に到達した一人。「歷程」同人。

<生没>

1925(大正 14)年 12 月 28 日 ~ 2016(平成 28)年6月8日

<代表作>

詩集『エスキス』

<青森との関わり>

青森市大字浪打字造道生まれ。橋本小学校、浪打高等小学校卒。1961(昭和 36)年まで在青。

2、作家解説

鎌田喜八は、1954(昭和 29)年1月、西平内国立療養所時代の詩誌「プシケ」の詩友など少数を集め、「圏」を創刊。1960(35)年 11 月 58 号まで、ガリ刷りで月刊を持続した。「圏」は戦後現代詩の勃興期を背景に、広く県内の若手詩人志望者を迎え入れ、鎌田はそのうちの幾人かに深い影響を残した。彼は「圏」に名作「エスキス」を連作し、驚くべき集中力によって以後の 20 編を含め、7年間ほとんど休みなく約 70 編の粒選りの秀作を発表し続けた。そしてその凝縮された営みによって、その頃の東京詩壇に少なからず衝撃をもたらした。その間、青森を去るまでに、戦後初めて全県的な詩人の組織作りのために県内を行脚。1959(昭和 34)年、青森県詩人協会の発足を実現した。1960 年代、鎌田は主に「詩学」「現代詩手帖」に作品を発表収録し、戦後詩に特異な妖光を放つ詩人として、欠かすことのできない位置を占めた。その後、1973(48)年、旧「圏」同人たちと共に青森市に「胴乱」を開き、作品「光景」他を制作、その妖しい観相の仙境を更に奥深く分け入っていった。

鎌田喜八の全貌をひとくちに言い当てる事は難しい。特色はというと、やはり言語の絵画化詩人と言えるだろう。彼の特技は、人間存在の深層風景の諸相を、透視、分析、解体の手續きに従って、或る時は冷静な臨床医となり、また或る場面ではミスの多い私立探偵に扮し、緻密な描写の語り口によって絵画化、作像化してみせる事だ。彼の想像力は文明の廃虚を好み、臨港引込み線路、月光のもとマンホールの下にくりひろげられる、迷宮の住人、生きものたちの隠微な宴を探り当てる。彼の語法は異様なまでに知的臨場感に充ちている。

彼は言う。「詩的なものとは、いつも日常的な意味領域から溢れ出し、それとは別の場所に、自立的な言葉の世界を作り上げる」のだと。鎌田の想像力は脳宇宙や器官、五感のミクロの世界に潜入し、内視鏡的手法を用いて、存在機能そのものの不条理の劇を、体験的に語ってくれる。ミシヨウとの類似は超俗反文化という点にある。

3、資料紹介

○『エスキス』

図書

1956(昭和31)年3月31日

185mm×131mm

鎌田ワールドの特異さとは何か。それは戦後詩に初めて内的批評体様式の散文詩という、独自の手法光学を導入し、実存の周りの始源認識を絵画映像的に、限界近くまで追及開示した点だ。その語法は生態触手的であり、観念と記号との不可避な迷路は危険が一杯だ。